中国語訳萬葉集と一戸務

――「日支同文同種」論批判と関わって――

小松靖彦

一　日中戦争と中国語訳萬葉集

日中戦争（一九三七～一九四五。中国側名称「抗日戦争」「日本侵華戦争」〈一九三一（「九一八事変」〈日本側名称「柳条湖事件」〉）～一九四五〉は、二〇世紀の戦争でありながら、「近代の戦争」として捉えきれない性格を持っている。そのポイントは以下の二点である。

第一に、日中戦争は、「国民国家」（national-state）としての「日本」と、「国民国家」が未成立で多元的な〈中国〉との間の、〈非対称の戦争〉であった。〈中国〉では、複数の政治勢力が割拠し、さらに、それらの政治勢力と軍、富裕層、「日本」への協力者（「漢奸」）、知識人、都市民、農民がそれぞれに違った動き方を見せた。[1] 単純に、「日本」と「中華民国政府」の戦争と捉えることはできないのである（それゆえ、特に政治的経済的に広く中国を指す場合には〈中国〉と表記する）。

第二に、日中戦争は、「日本」と〈中国〉という異文化の衝突であったが、両者は、東アジア特有の現実主義、生命への愛着、儒教的倫理観を共有しているという面も持つ。[2] さらに「漢字」「漢文」もこれに加えることができる。このように共通点のあることが、互いに誤解を含んだ親近感と、その裏返しとしての憎悪を生んでいた。

文学はこの第二の点を明らかにするための重要な手懸かりであり、文学研究には両国間の親近感と憎悪を歴史的に解明し、日中の文化的関係を新たに捉え直す役割が課せられていると思われる。もちろん、その研究を進める際には、第一の点を常に意識し、〈中国〉の多元性を具体的に捉えることが必要である。

第二の点を歴史的に解き明かす一つの材料となるものが、中

国語訳萬葉集と、これに関して独自な立場から積極的に発言した中国文学者・小説家の一戸務（いちのへつとむ）の〈中国〉観である（以下、引用する文や語句に、今日から見て差別的な表現があるが、歴史的資料として原文通りに引用する）。

一戸は、「支那事変」（日中戦争）が勃発する一九三七年（昭和一二）七月七日の約一か月前に刊行された雑誌「文学」の「萬葉集研究」特輯号（第5巻第6号、一九三七・六）に、「萬葉集の支那訳」という評論を寄せた。この評論において、一戸は当時『萬葉集』の中国語訳がごく僅かしか行われていなかったことについて、「日支親善」を言いながらその事業を実行しないのは「国民の罪であり政府の落度」であると断じた。一戸はまた、『萬葉集』を即自的に「日本精神」の表れとする当時の一般的な見方についても疑問を呈した。

一戸の『萬葉集』の捉え方の基底には、「日支同文同種」という考え方への痛烈な批判があった。「同文同種」とは、「国と国とで互いに文字が同じで、人種も外見上同じであること」（『日本国語大辞典（第二版）』）を言う。「日本」と〈中国〉の間で「同文」と言うときには、「漢字」「漢文」を指している。しかし、一戸は「日本語文」と「支那語文」をあくまでも別物と捉えた。「日支同文同種」の考えに立って古典漢文を「訓読」するだけでは全く不十分であり、現に生きている「支那語」を学び、「現代支那文学」に通じてこそ、「支那」の人々の国民性を理解することができると説いた。

一戸はこの考え方に立って、「日本」側からも『萬葉集』を「支那」の人々に伝え、「相互対比批評」することの重要性を訴えた。その際、『萬葉集』を翻訳することばは、「支那の文言（文語）」ではなく、口語であった。

中国語訳萬葉集に対する一戸の考え方は、同時代における日中の〈相互理解〉をめざすものであった。しかし、その後の中国語訳萬葉集の動きは、一戸の期待とは逆方向に向かう。一九四〇年から歌人・国文学者の佐佐木信綱と日本文学研究者の銭稲孫 Qian Daosun（一八八七～一九六六）が共同作業で進めた中国語訳萬葉集は、「漢訳」と呼ばれたように[3]、文語定型詩としての翻訳であった。

一方、一戸自身も、一九四一年一二月の「大東亜戦争」（太平洋戦争）開戦後の、第一回大東亜文学者大会（一九四二年一一月）において、「同文同種」論的主張を展開するようになる。なぜ一戸は変化したのか。あるいは、実は変化していなかったのか。

本論は、一戸の中国語訳萬葉集論とその基底にあった「日支同文同種」論批判を歴史的に検討し、一九三〇年代に中国文学者・一戸が提唱した日中の〈相互理解〉の可能性と、それが実現しなかった理由を見届けるものである。この考察は、日中戦争下に、日中間で親近感と憎悪を生んだ〈相互誤解〉の構造の一端を明らかにすることをめざしている[4]。

二　一戸務とその評価

論に先立ち、一戸の経歴と業績を簡略にまとめておく。[5]

一戸は一九〇四年（明治三七）八月一九日、東京生まれ。没年は、一九七七年（昭和五二）[6]。一九三〇年に東京帝国大学文学部支那文学科を卒業。中国文学者・塩谷温（しおのやおん）（一八七八～一九六一）の門下であった。塩谷はドイツおよび清国留学中に、中国の元・明・清代の戯曲・小説が重視されていることを学び、支那文学科で訓読による漢文研究ではない、中国語による中国俗文学の本格的研究を興した。[7]一戸は在学中から、年齢の近い同門の、目加田誠（めかだまこと）（一九〇四～一九九四）、松枝茂夫（一九〇五～一九九五）らとともに、魯迅、郁達夫、郭沫若などの現代文学に親しんだ。

第一〇次「新思潮」に参加し、創刊号（一九二九・五）に随筆「歩かない」と小説「よる」を発表。以後、「新思潮」に随筆、小説、演劇時評を寄稿した。一九三〇年から「文芸レビュー」などに小説を発表。他に「L' ESPRIT NOUVEAU」、「新科学的文芸」、「文学風景」、「近代生活」、「文学クオタリイ」、「作品」、「三田文学」、「文芸汎論」などに創作を、「詩と詩論」にT・S・エリオットなどの英訳を、「新文学研究」、「行動」などに評論を発表した。

「文芸レビュー」（第2巻第9号、一九三〇・五）の「描く素顔・描かれる素顔」の特集において、前衛詩人・北園克衛（一九〇二～一九七八）は、一戸の肖像を、マルセル・プルーストの系列に属し、現代にはあまりに新しく複雑過ぎるロマネスクな影の魔術の小説家と描いた（「一戸務の一面」）。曾根博義は、一戸の文学活動を「いわゆる芸術派の一人として幅広い活躍をした」[8]と捉える。一戸がモダニズムを志向する文学者であったことが注目される。

また、一戸は「文学」（第1巻第5号、一九三三・八）に森鷗外『澁江抽齋』の新資料を、「書物展望」にたびたび鷗外の未発表資料を紹介している。顧偉良によれば、一戸は鷗外の蔵書整理も行い、東京大学図書館の「鷗外文庫」の完成にも携わった。[9]

一九三五年に、竹内好（一九一〇～一九七七）の主導で、現代中国文学を研究する中国文学研究会が創設された。大原祐治によれば、中国文学研究会は同好会的なものではなく、「あくまでも旧来の漢学アカデミズムに反旗を翻すべく企図された、多分に政治的な試み」[10]であった。一戸は、学会事情に通じた先輩の一人として竹内に招かれ、この研究会に参加した。竹内の日記からは、一戸が雑誌「中国文学月報」の編集を担当し、中国文学研究会の中心的メンバーの一人であったことがわかる。[11]

中国文学研究会への参加以後、一戸は「中国文学月報」を始め、「文学」、「書物展望」、「新潮」、「文芸通信」、「日本学芸新聞」などに「現代支那文学」についての評論を発表するようになる。一九三六年には外務省の委嘱で、「北平」（現在の北京）の諸大学制度の調査と各地の図書館所蔵の稀覯書閲覧の旅をする（『現代支那の文化と芸術』三五～三六頁、『支那の発見』一四七頁、一六六頁）。「大

東亜戦争」開戦後には、第一回、第二回大東亜文学者大会（一九四二、四三年）に出席。書籍・雑誌での創作や評論の発表は、一九五〇年の「漢文調の湿潤―現代文と漢文脈―」（『国文学解釈と鑑賞』第15巻第4号、一九五〇・四）を除き、一九四四年で終わっている。

戦後の活動としては、一九五六年一〇月に日中文化交流協会主催の第一回日本作家訪中団の一員となり、同月一四日に、北京の周作人を訪ねていることが知られる[12]。

主な著作に、評論集『現代支那の文化と芸術』（松山房、一九三九・一一）、同『支那の発見』（光風館、一九四二・一）、小説『竹藪の家』（ボン書店、一九三五・九）、説話集『支那伝説集 南山の雛』（光風館、一九四二・一一）、翻訳『周作人 苦茶随筆』（装幀・亀倉雄策、カット・本津恵三、名取書店、一九四〇・九）がある。

一戸は、日本近代文学、日本近代文学研究、中国現代文学研究において注目すべき活動を展開したが、今日では埋もれた作家・研究者となっている。大東亜文学者大会への出席（竹内は参加せず）、戦後における文筆活動からの離脱などがその理由と思われる。また、竹内の〝正統的〟な魯迅論に対して、一戸の魯迅論があまりに異端的であったこともその一因と思われる。

二〇〇〇年に『現代支那の文化と芸術』が、シリーズ「文化人の見た近代アジア」の一冊としてゆまに書房から復刊され、小川直美による解説において、中国に関わった知識人として一戸の評価が示された。小川は、一戸の「中国情勢の認識」が「国策」と一致し、多くの「支那通」たちと共通すると見た[13]。また、一戸の「日支同文同種」論批判については、「現代中国を見よ、と主張する一方でその背景に目をふさぎ、「学者」という自己限定を免罪符にすることに気付かない一戸の矛盾」を指摘した[14]。

確かに一戸の「中国情勢の認識」は、基本的には「国策」と重なる。しかし、一戸の「現代中国を見よ」という主張は「国策」の範囲に止まるものではない。一戸の主張の可能性と限界を見定める必要がある。

二〇一七年に、周作人研究の側から、新たな一戸評価が提示された。顧偉良は、一九二九年から一九五六年に及ぶ周作人と一戸の交流を丹念に跡付けた上で、小説の思想性を追究する竹内の魯迅論に対して、「小説の言葉と世界との関係に深い洞察性を働かせ」たものとして、一戸の魯迅論を高く評価した[15]。

一戸は、魯迅の文学を「現代支那社会」に対する〈皮肉〉の文学と捉えていた。そして、魯迅の〈皮肉〉を理解するためには、「現代支那社会」の理解が不可欠であると主張した（「魯迅随想」『現代支那の文化と芸術』、これを加筆した「魯迅論」『支那の発見』）。一戸の魯迅論の独創性は、「現代中国を見よ」という立場に由来している。

一九三〇、四〇年代という時代の文脈の中で、一戸自身に即して、その中国観を捉え直すことこそが、今、重要である。

三　「文学」誌の特集「海外に於ける萬葉集研究」

一戸の評論「萬葉集の支那訳」は、戦前の日本人による、中

国語訳萬葉集に関する唯一の本格的論考である。この評論が掲載された、一九三七年（昭和一二）六月刊行の「文学」の「萬葉集研究」特輯号に注目したい。この号の後半には、以下のように、海外における萬葉集研究の小特集が組まれている。

西欧に於ける萬葉集　久松潜一
英訳萬葉集に就いて　佐佐木信綱

海外に於ける萬葉集研究

英文萬葉集文献　大和資雄
フランスに於ける萬葉研究　河盛好蔵
ドイツと萬葉集　芳賀檀
ロシア人と萬葉集　尾瀬敬止
萬葉集の支那訳　一戸務

このような小特集が組まれたのは、「文学」では初めてである。その背景には、一九三五年から一九三六年に、久松潜一がヨーロッパ諸国を巡って日本文学の研究状況を調査し、『萬葉集』研究が進展していることを確認したこと（久松『西欧における日本文学』至文堂、一九三七・一二）と、一九三四年に日本学術振興会に設置された第一七小委員会による、佐佐木信綱を中心とする英訳萬葉集の事業が完成に近づいていたことがあると思われる。[16]

この時期、久松は日本文学を中心とする「世界文学」を構想していた（久松『萬葉集に現れたる日本精神』至文堂、一九三七・一）。[17]また、信綱は早くから、日本人による『萬葉集』の海外への普及に極めて熱心であり、「文学」掲載の「英訳萬葉集に就いて」では次のように述べている（傍線は引用者。以下同）。

> […] 自分は、年来、邦人の手による萬葉集の良き訳が成されて、文学の形に現はれた日本精神の真相を伝へることの出来るやう、希望してをつたのである。

「文学」の「萬葉集研究」特輯号が刊行される前年の一九三六年二月には二・二六事件が起り、社会は重苦しい空気に包まれた。その後、日独防共協定調印（一一月）、ワシントン海軍軍縮条約の失効（一二月）と、軍の意向に沿った政策が進められた。半藤一利によれば、一九三七年に入ると、重苦しい空気を打ち破るべく、軍主導の「中国一撃すべし」という戦争待望論が「国民」の間で広がったという。[18]

その中で、一月刊行の久松潜一『萬葉集に現れたる日本精神』が好評を博し直ちに版を重ね、[19]三月には、『萬葉集』に「国民道徳」の根本を見る『国体の本義』（文部省）も刊行された。

「文学」の「萬葉集研究」特輯号も、このような社会的動向の流れに立つものであり、特に小特集「海外に於ける萬葉集研究」は、『萬葉集』が〝世界的な文学〟であることを確認し、「萬葉集に現れたる日本精神」について、「日本人」の自信を深めることをめざしたものであったと思われる。一戸が「萬葉集の支那訳」で、「日本精神」を論じているのもそのためであろう。

しかし、一戸は編輯者から与えられた「萬葉集の支那訳」という課題に苦しんだ。論文の材料となるような『萬葉集』の中国語訳を見出せなかったからである。そこで、一戸は「論文」

ではなく、「評論」として、本格的中国語訳への期待と、「萬葉集に現れたる日本精神」をどのように捉えるべきかを述べる道を選んだ。

四　『萬葉集』の「日本精神」をめぐる一戸務の主張

一戸の評論「萬葉集の支那訳」の主張の要点は以下のようにまとめられる（なお、一戸は「萬葉集の支那訳」を『支那の文化と芸術』、および『支那の発見』に再録するに当たって加筆修正を行っている。それは、一箇所の大幅な加筆〈後述〉を除くと、引用した人物の肩書、字句と表記の修正に止まり、論旨そのものには大きな変更はない。本稿では、最終形である『支那の発見』の本文によって考察を進める。「　」内は原文[20]）。

(1)「問題にする程の支那訳」がないのは、日本が「日支親善」を論じながら、そのための文化的事業を行っていないからである。それは「国民の罪であり政府の落度なのである」。

(2)我々日本人は『萬葉集』の傑出した文学性を承知しており、『萬葉集』は日本人の間で流布している。『詩経』や『楚辞』を自国の古代詩歌として誇る「支那本国」に、「東洋の盟主」と自任するようになった日本にも『萬葉集』があることを一日も早く紹介すべきである。

(3)『萬葉集』を「日本精神」の表れとして「支那」に紹介輸出することはできない。『萬葉集』が当時の「日支相互の文化関係」から生まれたものだからである。

(4)『萬葉集』を現代の「支那」の人々が読んで批評し、『詩経』や『楚辞』などの思想、文学的技巧との相関を差し引いたとき、「純粋の日本奈良朝の人々の特性」や「飛鳥寧楽時代の真の日本人の姿」を明らかにできる。

(5)「日支」が相互に他人顔でいると、東洋思想は西欧学者の研究対象となるばかりである。国際文化振興会は、英訳萬葉集よりも「漢訳萬葉集」完成を援助すべきであり、それが「東洋平和」の第一歩となる。

(6)日本の和歌は「支那」の文語で訳すことは困難である。文学革命後、口語の時代となって初めて翻訳可能となった。

一戸の主張の中で特に注目されるのは、(3)・(4)・(6)である。(3)の主張は、一九三〇年代に「国文学者」たちによって主導され流布していた、『萬葉集』を即時的に「日本精神」の表れとする見方への批判に外ならない。

ただし、「国文学者」たちも、『萬葉集』が「外来思想」の影響を受けていることを、十分に意識していた。

・［…］外来思想を以つて、日本精神発揮の様式と為したところにこの文書［引用注、越前国足羽郡江下郷・生江臣家道女とその母・生江臣大田女が、聖武太上天皇の追善と孝謙天皇の寿福を祈り、経巻を貢上したことを記す「正倉院文書」］の意義があるので、萬葉歌人が、外来思想を智識として取り入れながら、正しき理解のもとに、皇国の大道を主張してゐるのと同様である。（武田祐吉『萬葉集と忠君愛国』日本精神叢書、八・外来思想と日本精神、四〇頁、日本文化協会出版部、一九三六・一）

・［…］又思想上にも、支那大陸に発達した儒教及び道教の思想が渡来し、また、印度大陸を発生地とする仏教の思想も入り来つて、我が国民の思想の整理発達に関与する所が多かつたのである。それは従来内に潜んで来た自覚を有することの無かつた徳目が、これ等の思想に依つて明かなる概念を得るに至つたが如きこれである。（武田祐吉『萬葉集と国民性』日本精神叢書、八・外来文化の輸入、三九頁、文部省思想局、一九三七・二）

・［…］当時にあつては外国の思想がかなり深く広く、社会の各方面に渦を巻いてゐたやうに考へられるかも知れないが、それは澄み渡つた大空には、浮動する僅かばかりの雲でも目立つやうなもので、これを思想の主流であつた純日本思想に比較すれば、極めて些少な量であつた。これに反して、澎湃として漲り流れてゐた純日本思想は、実に力強く宏大なものであつたのである。（鴻巣盛広『萬葉精神』日本精神叢書、二・外来思想、一四～一五頁、教学局、一九三八・六）

「国文学者」の武田祐吉、鴻巣盛広は、『萬葉集』などの上代文献への儒教、道教、仏教の影響を指摘しながら、それが「日本精神」に明確な形をとらせた（武田）、あるいは、その影響は一部にとどまった（鴻巣）とした。

一戸は、「国文学者」たちのこのような捉え方と大きく異なる立場をとり、(4)のように主張する。すなわち、「萬葉集に現はれたる支那思想の影響」のような文献比較ではなく、『萬葉集』を「支那訳して、現代の支那の文学者の心にひゞかせ批評させる」（六〇頁）ほうが遙かに意味があると考える。

『萬葉集』に影響を与えた中国側の見解がなくても可能な文献比較よりも、一戸の同時代の中国人のまなざしによってこそ、『萬葉集』に表れた日本人の特性を明らかにできるという一戸の主張は、相互的である。

こうした(3)・(4)の考え方に立てば、『萬葉集』の中国語訳は当然口語がよいということになろう。(6)は、口語でなければ日本の和歌は訳せない、と文語の限界を指摘するものであるが、そこには『萬葉集』も口語で訳すべきであるという主張が含まれていると見てよい。

(3)・(4)・(6)のような『萬葉集』および中国語訳萬葉集についての一戸の考え方は、一九三〇年代において（『支那の発見』が刊行された一九四〇年代初期においても）、極めて特異なものであった。『萬葉集』の歌が制作された年代（七世紀後半～八世紀前半）にこだわらず、同時代の中国人のまなざしによって、日本的性格を明らかにするという方法は、今日においても粗い印象を与える。なぜなら千三百年前の中国人と現代中国人の感性や思考法が同じであるという保証はないからである。一戸の評論が発表された当時は、なお意想外の印象を強く持たれたことであろう。

しかし、一戸がこの方法を主張したことには根拠があった。作家・編集者・翻訳者・文学研究者の謝六逸 Xie Liuyui（一八九八～一九四五）の日本文学論がそれである。[3]

五　一戸務と謝六逸

「文学」の「萬葉集研究」特輯号の刊行から一年遡る一九二六年（大正一五）六月刊行の「改造」の「現代支那号」（第8巻第8号）に、謝六逸が評論「日本古典文学に就て」[22]を発表している。一戸の「萬葉集の支那訳」は、この謝六逸の評論に対して日本側から応答したものと言えるほどに、論点が重なっている（以下の一戸の引用文は全て初出から見られ、加筆部分のものではない）。

1〈日中相互の文学・文化への軽侮〉

【謝六逸】支那に於ける一般の人士は、日本文学の研究なる一語を耳にする毎に、直ちに一種軽蔑の心を生じ、「日本文学が果して研究に値するであらうか」と云つた様な懸念が、始終談話の中に見出される。長い間日本に居た留学生でも、その多くは政治経済法律科学等を研究した人々で、矢張日本の文学を軽視することを免れない。

【一戸務】［…］事実、現代日本は支那の文化を莫迦にし、支那は日本の文化を莫迦にしてゐる。（『支那の発見』六一頁）

2〈日中が相互に誇れる詩歌〉

【謝六逸】「萬葉集」中の歌句には、数多の頗る傑出せるものが存在する。東洋詩歌としては、自ら第一に指を支那に指を屈せねばならぬが、支那には嘗て三十一字形の短歌がない。此れは日本特有の産出物と云はざるを得ない。

【一戸務】［…］支那本国でいへば、「詩経」といひ（「云」〈初出、『現代支那の文化と芸術』〉ひ「楚辞」といひ、大文学であり、自国の古代詩歌としての誇りであらうが、日本文学中にも、「萬葉集」の如きもの、（「の」〈初出〉）あることを一日も早く紹介して、相互対比批評してもよいのである。（五七～五八頁）

3〈東洋の宝としての『萬葉集』〉

【謝六逸】［…］東西洋の何人を問はず、若し日本の古典文学に就て尋ねる者があつたならば、余等は躊躇なく答へるであらう。「韻文には萬葉あり、散文には源氏あり」と。これ実に誇るに値するもので我等東亜の宝庫である。

【一戸務】［…］かゝる当時の日支相互の文化関係よりしても生れた「萬葉集」が、現在、東洋の盟主と自任するやうになつた日本になつて、支那に「萬葉集」を紹介せぬのは片手落ちともい（「云」〈初出、『現代支那の文化と芸術』〉へる。（五八頁）

「支那」の日本文学軽侮を指摘する謝六逸に対して、一戸は当時の日本の「支那」文化軽侮を加え（1の項）、また、「支那」の詩を第一としつつ、『萬葉集』に傑出した歌句があるとする謝六逸に対して、一戸はその誇りを認めながら、『萬葉集』の存在を一日も早く「支那」に知らしめたいと述べ（2の項）、さらに、『萬葉集』を「我等東亜の宝庫」とする謝六逸に対して、一戸は、「東洋の盟主」を自任する日本にはその『萬葉集』を紹介する責務があると主張している（3の項）、と読むことがで

きる。

「文学」掲載の初出では、一戸は謝六逸の名やその評論「日本古典文学に就て」には全く言及しない。二年後に刊行した『現代支那の文化と芸術』において、謝六逸を、その著書『日本文學史』（上海北新書店、一九二九）と「日本古典文学に就て」とともに紹介し、また、『日本文學史』所収の『萬葉集』の「支那訳」から短歌一八首を引用する、という大幅な加筆を行った（約三頁分）。

初出の段階で、一戸が謝六逸の評論に気づかなかった、ということではあるまい。「私は私の調べうる範囲において（「於」〈初出、『現代支那の文化と芸術』〉）て充分それ［引用注、『萬葉集』の「支那訳」］を調査した」（五一頁）と言い、また右に見たような論点の重なりによれば、一戸が初出以前に謝六逸の著書や評論を読んでいた可能性は十分に考えられる。[23]

実は、この謝六逸の評論には、まさに一戸が期待する「現代の支那」の側からの『萬葉集』についての「批評」が記されている。

・［…］短歌は一見簡陋にして深意無きに似たるも、然も能く一時の情感を捉へて、三十一字の形式を以て写し出したところ、実に一種単純なる情趣がある。

・［…］「柿本人麿妻死之後泣血哀慟作歌」［引用注、巻二・二〇七］は、余をして頗る軽淡なる凄涼味を感ぜしめる。

・日本固有の詩歌は、世界文学上極めて優秀なる位置を占めて居る。萬葉古今二集の外、芭蕉の俳句の如き、能く純撲の調子を以て微妙の感情を伝へる。[24]

謝六逸は、『萬葉集』の短歌に、三一文字の「形式」による「単純なる情趣」を認め、また、柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」に「軽淡なる凄涼味（あっさりとしたもの寂しさ）」を感じ取った。

『萬葉集』の短歌に「単純なる情趣」を見ることは、佐佐木信綱『萬葉集選釈』（明治書院、一九一六・一二）以来、日本では常識化した捉え方であるが、[25]それが三一文字という「形式」と関わることを強調したところに、謝六逸の見方の特徴がある。この見方は中国古典詩歌が「形式」を極めて重視することに由来するものであろう。

「泣血哀慟歌」に「軽淡なる凄涼味」を指摘することは、かなり特異なことである。日本では、二〇七番歌に、「真情流露して、哀しみの切な点に於いてすぐれて居る」（佐佐木『萬葉集選釈』六八頁）、「純情の人でなくては、かうした作は出来難い」（鴻巣盛広『萬葉集全釈』第一冊、二二六頁、広文堂、一九三〇・五）など、真情や思慕の深さ激しさを見るのが一般的である。[26]しかし、たとえば、妻の居ない状況を事細かに描き、一人残された哀しみを執拗に歌う、西晋の潘岳の「悼亡詩三首」（『文選』巻二三）と比較するならば、謝六逸の指摘も納得することができる。

一戸は、謝六逸のこのような「批評」に手応えを感じ、「支那訳」によって、『萬葉集』を「現代の支那の文学者の心にひゞかせ批評させる」ことが可能であり、実りあることと考えたの

であろう。しかも、謝六逸の翻訳は口語によるものであった。

一戸の考えた、同時代の中国人のまなざしによる批評は、比較文学の方法としては粗いものであるが、確かに日本人の気づかない『萬葉集』の特徴を浮かび上がらせるという面を持っている。

六　「日支同文同種」論と一戸務によるその批判

同時代の中国人のまなざしによる『萬葉集』の批評という一戸の方法は独創的であるが、『萬葉集』の「支那訳」の最終目標が、「純粋の日本奈良朝の人々の特性」や「飛鳥寧楽時代の真の日本人の姿」を明らかにすることであったことに改めて注意したい。一戸は、『萬葉集』を即時的に「日本精神」の表れと見ることを否定したが、結局は『萬葉集』から、より〝純粋な〟「日本精神」を抽出することをめざしているのである。

一戸の提案する、「現代」の「日本」の文学者と「現代の支那の文学者たち」による、『詩経』・『楚辞』と『萬葉集』をめぐる「相互対比批評」は、両者の〈共通性〉ではなく、あくまでも〈差異〉と、それぞれの〈独自性〉を確認するものであった。[26]

この「日支」間の〈差異〉への注目は、「支那事変」以後、「日支同文同種」論に対する痛烈な批判という形をとるようになる。

「同文同種」（または「同文同人種」、「同種同文」）は、国語辞書の類では、一九二〇年（大正九）四月刊行の小林鶯里『現代日用新語辞典』（上方屋書店）に登載されたのが比較的早い例のようである。[27] 新聞では、一九〇〇年（明治三三）頃から例が見える（以下、年代順に配列。ルビは省略）。

① […] 而して我国と清国とが同文同種にして、其習俗慣習も相同じく、為に自ら双方に親和の情交を生ずること到底欧米人と清国人と相交るが如きものにもあらず、（「積極的平和策（一）」（大隈伯の対東邦策）」「東京朝日新聞」一九〇〇年三月二四日付朝刊一面）

② 元来日本人と支那人とは、同じく東亜の地に棲息し、幾分か似よりたる所あるにより同文同種唇歯輔車相頼るの関係ありなど、称し、日本的の鋳型に入れて教育を施さば、日本人同様の情義を熱する人物を製造するを得べしと思ふ者も有之候へども、大なる誤解と存じ候、（千穂生「銀座より」「読売新聞」一九一二年一一月二五日付朝刊一面）

③ […] 対支外交に就て一言すべきは余りに要求が多岐に渉りたるに非ざるが由来帝国の外交は啻に紙上の権利を得んことにのみ努力せるの傾きあり日支は同文同人種の関係にあればなるべく些細の権利に就ては紙上の約束を為さゞるを得策とす（「対支外交問題論議」の松岡康毅談［対華二一か条要求についてのコメント］、「読売新聞」一九一五年四月二六日付朝刊二面）

④ […] 故に説者思へらく、日本は必ず中国を分割するを以て国益となし、敢て中国と手を握り、東洋の平和を保つ

ことを欲せず、彼の所謂同文同種云々の如きは皆外交的辞令のみ容易に之を信ずべきに非ざるなり、予は思ふ此説も一理なきに非ず、（「日支親善論(下)」「読売新聞」一九一五年一〇月三一日付朝刊三面）

「同文同種」は、日本の清国への侵出を正当化することばとして用いられる一方（①の例）、「中華民国」に対する行き過ぎた要求を批判することばとしても用いられている（③の例）。また、「同文同種」を批判的に用いる場合には、信ずるに足らぬ外交辞令とされ（④の例）、さらには日本の習俗に馴染まぬ「支那」の人々を差別的に捉える際のことばとされている（②の例）。

これらの用例を見ると、「同文同種」は肯定するにしても批判するにしても、「日支関係」における表裏一体の親近感と憎悪を表現することばとなっているように思われる。

一九三〇年代になると「同文同種」は、政治・文化において肯定的に盛んに主張されるようになる。それは、満洲事変勃発（一九三一年九月）から、第一次上海事変（一九三二年一月～三月。五月に停戦協定）、「満洲国」建国（一九三二年三月）、そして「支那事変」へと、「日支」が戦争状態に入っていたことによるのであろう。「同文同種」は、「支那」への侵出を正当化するのに、最も便利なことばであった。[28]

一戸は「支那事変」以後、繰り返し「日支同文同種」論批判を行ったが、その論旨は一貫している。以下に、その代表的な箇所を引用する（本文は『支那の発見』に拠る）。

❶ […] 返り点を行つて支那の散文を読むのは所謂「翻訳」であるとの考へは、日支同文といふ誤つた支那文学研究に禍ひされて、今日でも一部の支那文学者の間には信じられてゐるもので、山室［引用注、三良］氏などはそれを代表したのであらうが、詩文ばかりではなく戯曲小説の天地までも研究し、真の支那風土習慣に立脚し、支那の支那文学を研究するには返り点読みでは解決できぬ最後の線があるのである。（「支那小説と翻訳」『支那の発見』四四～四五頁）

❷ […] 東洋の二国家は、徒らに自国主義になり、東洋民族結合の風をうすめ、東洋文化は或意味では没落に至るのではないかとの悲観説も生じて来るのである。両国は同種同文の間柄であると、いかにも親族和合の如き態度はしてゐたが、実際に活用されてゐる両国の言語などさへ、互に理解を有するものが僅少であつた。［…中略…］言語の疏通してゐる(ママ)処に、決して両国民の感情の融合なぞは考へられ(ママ)べくもない。東洋といふ天地は、相反駁した感情を保持する二つの国が、西欧文化心酔に浸つてゐた。（「民族文学」『支那の発見』二七九頁）

一戸の「日支同文同種」論批判の直接のターゲットは、❶のように〈漢文訓読〉であった。〈漢文訓読〉が、「現代支那文学」とそこに表れた「支那」の国民性の理解を阻んでいるとする。[29] この主張には、伝統主義を大胆に否定する、一戸のモダニストとしての面が躍如としている。

ところが、「日支同文同種」論を一戸が痛烈に批判した理由を示す❷では、それとは反対の面が現れる。「日支同文同種」論は、「日本」と「支那」の相互無理解による反目を助長し、その結果、「東洋文化」は滅亡の危機に曝されていると見る。その危機をもたらしているものは「西欧文化」（一戸は「欧米文化」とも言う）であると言う。かつて「L' ESPRIT NOUVEAU」に作品を発表し、T・S・エリオットの評論を日本語訳した（ともに一九三〇年）モダニストの一戸が、「西欧文化」を〈敵〉と意識しているのである。

なぜ一戸が❷の考え方に立ったのかについては、一九六〇年代に書かれた竹内好の評論「日本人のアジア観」[30]が手懸かりとなる。竹内は、明治時代に、アジア諸国が植民地または半植民地の状態に追い込まれており、同じ危険に曝されているという緊迫感を持った日本に、「独力をもって強大な西力に当たるよりは、近隣諸国が連合する方が容易」と考える、アジア連帯の思想、すなわち「興亜」思想が芽生えたと言う（九八頁）。

「日支同文同種」論を烈しく批判し、「日支」の〈差異〉に注意を向ける一戸の考え方（「異文異種」とも言う〈『支那の発見』三一八頁〉）は、一見「興亜論」の対極にある「脱亜論」のようにも見えるが、〈差異〉を互いに認めた上で連帯して「西力」に当たることをめざしており、竹内の言う「興亜論」の一種と言える[31]。通常「興亜論」が「日支同文同種」論をベースとするのに対し、「異文異種」を主張したところに、一戸の独自性がある。

また、竹内は、次のように、「アジアに責任を負う姿勢」の重要性を強調している。

朝鮮の国家を滅ぼし、中国の主権を侵す乱暴はあったが、ともかく日本は、過去七十年間、アジアとともに生きてきた。そこには朝鮮や中国との関連なしには生きられないという自覚が働いていた。侵略はよくないことだが、しかし侵略には、連帯感のゆがめられた表現という側面もある。無関心で他人まかせでいるよりは、ある意味では健全でさえある。（九五頁）

この発言は、今日から見ると直ちに賛成できるものではない。あくまでも一九六〇年代という文脈の中で理解すべきものであるが[32]、中国文学者の竹内が、「アジアに責任を負う」者としての自覚を戦前・戦後に一貫して持ち続けていたことがわかる。そして一戸もまた、〈アジアへの責任〉を自覚する者の一人であったと思われる。

七　「日支同文同種」論批判のナショナリズム

一戸の「日支同文同種」論批判は、「日支」の〈差異〉を前提とし、それぞれの〈独自性〉を認めた上で、その相互交流をめざすものであった。しかし、一戸が「萬葉集の支那訳」において、『詩経』や『楚辞』などの影響を排除したところで浮かび上がってくる〝純粋な〟「日本精神」を追求したことによれば、「日支」のそれぞれの〈独自性〉は、あくまでも排他的関係に

あり、交わることがない。

さらに、一戸の「日支同文同種」論批判においては、「日支」は対等な関係に立つことはない。「日本」は「東洋の盟主」として、「支那」を導き、「東洋平和」をもたらす存在なのである。

「日本」が「支那」に対して優位するという〈非対称〉な中国観は、一九世紀後半に始まる「興亜論」の基本的考え方であり[33]、一戸独自のものではない。一戸に即せば、次のような理由で、この中国観に与していったと考えられる。

第一に、一戸は「日本」を「支那」との〈戦争〉の勝利者と捉えていたことである。それを窺わせるのが評論「敗戦と文学」である。

> かゝる文化運動と平行して、支那民族運動が、国民政府の文化政策によつて拍車を加へられ、満洲事変、第一次上海事変以後、この民族解放の文化運動は、更に反帝国主義運動と合一して一つには日本を目して侵略国と誤解し、これを目標に、一九三六年に至ると遂に抗戦主義の文学を生むに至つた。（『支那の発見』二六二～二六三頁）

「敗戦と文学」で一戸は、一九二八年以後の「支那」の現代文学の動きを概観し、満洲事変、第一次上海事変が「抗日」の引き金となったことを正確に捉えている。にもかかわらず、日本は「侵略国」ではないと言う。当時の日本の「国民」は、満洲事変、第一次上海事変を「侵略」ではなく、〈中国〉の「軍閥」との〈戦争〉と捉えていた[34]。特に、戦闘が三四日間に及んだ第一次上海事変において、日本の新聞は中国兵を初めて「敵兵」と呼び[35]、また「非常時」であることを訴えた。第一次上海事変は「侵略」のための局地的戦闘ではなく、日本と「軍閥政府」間の大規模な〈戦争〉と捉えられていたのである。そうであったから、中国・国民革命軍（第一九路軍）が撤退したとき、多くの「国民」が「勝利」に酔い痴れた。

一戸もやはり満洲事変、第一次上海事変を〈戦争〉と見ていたと思われる。それゆえ、「支那事変」が勃発すると、「ラヂオの戦況ニュースに心を躍らせ」（「北京点々」『現代支那の文化と芸術』三頁）、「皇軍の活躍は日に日に進み、敗戦の支那は、後退をよぎなくされ」（「敗戦と文学」『支那の発見』二六四頁）と躊躇なく、「支那」を「敗者」と言ったのであろう。

ただし、一戸が「敗戦の支那」と言うときに、それが指しているものは、「不法支那軍閥」と「国民政府」（「北京点々」『現代支那の文化と芸術』三頁）である。一戸は「東洋平和」を破壊するものとして、「支那軍」と「国民政府」に反感を持っていたが、民衆に対しては強い共感を寄せていた。これが第二の理由である。一戸は「支那」の民衆を次のように捉える。

> […] 彼等［引用注、知識人］の外に更に支那には土地と共に生存してゐる三億の農民土民がゐるのである。日々の飲食のみに生の楽しみを満足し、祖国愛もなく、だから国家認識なぞはありやうもない、支那の「国家」は滅びやうとも、支那の土地が、この世に現存する限りは失せざることのな

い文盲階級者が数億人もゐるのである。彼等は、平和を愛してゐる。賭博の行はれる日々を好んでゐる。阿片耽溺の夢を忘却しかねてゐる。土と共に生き、土と共に去るを知らぬ彼等である。（「大陸の風」『現代支那の文化と芸術』二六六～二六七頁）

そして、評論「支那の抗日国防の文学」では、彼らを「純情無垢な一般無知識な民衆」と言い、知識人の「国防文学」の被害者と位置づけている（『現代支那の文化と芸術』二四六頁、「民族文学」『支那の発見』三〇一頁）。

一戸が描いた、「国家認識」を持たず、〈生〉を愛する民衆像は、江沛が明らかにした、一九四一年から一九四二年の「治安強化運動」期の華北の農民大衆の心性と一致するところがある。江沛は、その心性を、国家意識・民族意識に乏しく、政治に対しては傍観的態度をとり、また、生命を尊重する考え方から、集団的な恐怖心にも囚われていたと説明する。[36]

一戸は「支那」の民衆の実像をある程度的確に捉えていたと言えるが、それは、一戸の実体験に基づいている。一戸は一九三六年に「北平」を旅したときに、貧民窟や阿片窟を訪れ、苦力（クーリー）たちに人生観を尋ね、また、女性や金銭、さらに政治についても雑談している。そして、彼らと「不潔そのもの、如き生活」をしていると自分が良寛になったような気がし、「この二十世紀の世に彼等程、純情無垢、虚栄のない生活をもつてゐるものは他にさうあるものでない」と感じた[37]（「北京点々」『現代支那の文化と芸術』二二～二四頁）。

一戸はこのような民衆を苦しめるものとして、「支那軍」、「国民政府」、知識人を憎むのである。しかし、ここには二重の優越意識が存在している。民衆に対する一戸の共感は、優位な位置からの憐みの性格が強い。また、「支那軍」、「国民政府」、知識人を政治・文化のリーダーとして劣るものと評価している。

すなわち、「日支」の〈独自性〉が排他的関係にあり、かつ「日支」が〈非対称〉である一戸の「日支同文同種」論批判は、「支那」に対する「戦勝国」である近代国家「日本」が、「日本精神」を純化し、それに基づく誇りと自信によって「支那」を導き、「支那」とともに「西欧文化」を跳ね返す、というものであった。一戸の「日支同文同種」論批判には、強力なナショナリズムが潜在していたのである。[38]

八　中国語訳萬葉集と「日支同文同種」論批判の行方

一戸は評論「萬葉集の支那訳」を『支那の発見』に再録するに当たり、「このごろ（昭和十六年）銭稲孫は「萬葉集」中のいく句かを支那訳されて、「日本の詩歌」といふ書物を刊行された（東京文求堂刊）」という注を末尾に加えた。この書物は正しくは、北京近代科学図書館編（著作権者）、銭稲孫訳『日本詩歌選』（文求堂書店、一九四一・四）である。『萬葉集』からは四四首がとられ、文語定型詩として中国語訳された。これらは、北京近代科学図書館の紀要「館刊」と月報「書滲」に発表され

たものである。

錢稲孫はなぜ文語定型詩として翻訳したのか。これに関して、鄒双双は、錢稲孫が土岐善麿に送った書簡を紹介している。土岐は「館刊」、「書滲」に掲載された錢稲孫の『萬葉集』の翻訳を見たことを『斜面の悒鬱』（八雲書林、一九四〇・五）に記した。これを見た錢稲孫が、土岐に書簡を送ったのである。その末尾には次のように記されていた（本文は、「書滲」第20号に「萬葉集の翻訳について」と題して掲載された書簡を、鄒双双が引用したものに拠る）。

お国［引用注、日本］の古文を漢訳するには鑑賞者を得るには相当困難の様です。あれば先づお国の方にその数を見るのでありませう、少くとも只今の所では。何故なれば両方の文に通じていらつしゃる方が、お国では多いからです。そこで是正を希望すると同時に、知己を求めんには、先づ海を隔てたお方方に首を伸ばして居ります。何卒その意味でも御見捨なく時々お指導あらんやうお願致します。

錢稲孫は、中国において、「古文」の『萬葉集』の読者を得ることは困難と考え、漢文に通じた日本人を読者に想定している。鄒双双は、「中国人の読者よりも、むしろ海を隔てた日本人の読者に知己を求め、日本の学者との交流を切望した」と述べる。[39]

さらに、錢稲孫は一九四〇年一月に佐佐木信綱を尋ね、そこで信綱から『萬葉集』の中国語訳の依頼を受けたと見られる。翻訳の作業は、信綱が歌を選び、錢稲孫が文語定型詩に訳し、それを漢学者・東洋史学者の市村瓚次郎（一八六四～一九四七）が校閲するという流れであった。作業は一九四四年で途絶えるが、一九五五年に再開、校閲は亡くなった市村の後を継いで、鈴木虎雄（一八七八～一九六三）が担当し、一九五九年六月に日本学術振興会から『漢訳萬葉集選』として刊行された（以上の経緯は、鄒双双による）。[40]

一戸より遙かに前の世代の漢学者たちが校閲を担当した『漢訳萬葉集選』も、やはり読者としては、漢文に通じた日本人と、錢稲孫のような、日本の「古文」の知識を持った中国知識人を想定していたのであろう。このような読者の想定は、もちろん日中間で戦争が行われていたという事情にもよろうが、そもそも『漢訳萬葉集選』が「同文同種」論に基づいて制作されたことが大きいと思われる。それほどまでに、日本において〈漢文訓読〉の影響は根深いものであった。[41]

一方、太平洋戦争下に、一戸も「日支同文同種」論批判の立場を変えた。第一回大東亜文学者大会（一九四二年一一月）に参加した一戸は、第二日の「文学を通じて大東亜戦争完遂についての方策」という議題に関して、胡適などの口語運動によって、「支那」の文章が口語文ばかりになり、「日本人」は読むのが困難になり、ことばが通じなくなったと言い、「中国」（汪精衛の南京国民政府）の側が文語を捨て、口語ばかりでいくのは「穏やかでない」と批判する。そして、次のように提案した。

その点で中国の方や、満洲国の方に特にお願ひしたいのは、文語と口語とを区別せず、その折衷文にして貰ひたい。

支那から入つて来た文語の中の漢字の使ひ方を、今日の支那の方がお使ひ下さるやうになれば、われわれがそれ等の文を読んでも理解が容易になり日支の親善になると思ひます。（「日本学芸新聞」第143号、一九四二・一一・一五）

口語の価値を認めているところに、「日支同文同種」論を批判してきた一戸らしさがある。しかし同時に、「支那」の文章を「日本人」が理解するために、「中国」や「満洲国」の人々が文語を使い続けることを希望する。つまり、日本・「満洲国」・「中華民国」（南京国民政府）の〈共通語〉としての文語の役割を重視したのである。それは、「日支同文同種」論に外ならない。

一戸の主張は、日本・「満洲国」・「中華民国」の〈共通言語〉を日本語にする、という考え方に比べれば穏健であるが、あくまでも〝日本の知識人が理解できる言語〟を求めるという点でナショナリスティックなものである。[42]「大東亜戦争」という〝現実〟の前で、一戸の「日支同文同種」論批判に潜在していたナショナリズムが前面に現れ出たと言える。

以上見てきたことによれば、一戸の『萬葉集』の中国語訳についての考え方は、画期的な性格を持っていた。それは文献的比較ではなく、日中間の相互的な批評を求め、相互の「国民性」の理解をめざすものであった。また、「日支同文同種」論批判は、日中間の〈差異〉を前提として、それぞれの〈独自性〉を尊重するものであり、相互理解を深める可能性を持っていた。

しかし、一戸の「日支同文同種」論批判は、結局は「同文同種」論と同じくナショナリズムに根差すものであり、この時期の「日本」と〈中国〉の本来あるべき関係、さらには長い日中関係の歴史を説明し、新たな日中関係を指し示すものとはなり得なかった。

すなわち、同文同種／異文異種、共通する／相違する、似ている／似ていない、などの鋭角的な二項対立（その基底には、どちらが優位かという〝評価〟がある）で、日中の関係を説明することは不可能なのである。そのような二項対立がどのように起こってくるのかを歴史的に問い直しながら、日中の文化的関係を捉えるための新たな方法を見出すことが、今日の私たちの課題である。

注

（1）日中戦争下の〈中国〉を多元的に捉える必要性については、第23回戦争と萬葉集研究会（二〇二〇年一一月二八日）で孫世偉氏から報告があった。また、第28回戦争と萬葉集研究会（二〇二一年九月二五日）で、日本軍、傀儡政権ポスト就任者（本質的「漢奸」、一般の偽職就任者に下位分類される）、平民それぞれの「心性」を論じた江沛「華北「治安強化運動」期における集合心性」（薮田麻夕子訳。エズラ・ヴォーゲル、平野健一郎編『日中戦争期中国の社会と文化』日中戦争の国際共同研究3、慶應義塾大学出版会、二〇一〇）の読書会を通じて、その必要性を改めて

確認した。

（2）日中戦争下における「日本」と〈中国〉間の、東アジア特有の現実主義、生命の愛着、儒教的倫理観の共有は、江沛注（1）論文による。

（3）たとえば、「読売新聞」一九四〇年八月二〇日付朝刊七面に「漢訳「萬葉集」の完成へ　日支友情の合作　新支那へ贈る麗しの文化の華」という見出しの記事がある。

（4）私は日中戦争を「日本」による〈中国〉への侵略と捉える。但し、江沛注（1）論文の、「無自覚に相手方を悪魔化し、自らを正当化するといった認識の図式」（二五三頁）、あるいは「一方を悪魔化し、もう一方を限りなく誇張することで徐々に形成されてきた中日戦争史を曲解する傾向」（二八五頁）から自由となることを「心性」の解明によってめざした問題意識に日本側から応える立場をとりたい。なお、このような問題意識に立つ江沛注（1）論文は画期的と言えるが、それでもなお当時の「日本」についての理解が十分でないと思われる点を含んでいる。それゆえ、日中戦争下の〈相互誤解〉を明確にし、少しずつでも〈相互理解〉を前進させることが肝要と思われる。

（5）一戸務の経歴と業績については、『日本近代文学大事典』第一巻（「一戸務」の項（曾根博義執筆、講談社、一九七七）、小川直美「解説　一戸務著『現代支那の文化と芸術』」（『現代支那の文化と芸術』文化人の見た近代アジア7、ゆまに書房、二〇〇二）、大原祐治「北京の輩と兵隊―「中国文学月報」における竹内好・武田泰淳―」（『学習院大学人文科学論集」XI、二〇〇二・一〇）、顧偉良「日中文化人の書簡交流にみる周作人の芸術と思想」（『世界の日本研究」二〇一七、二〇一七・五）を参照し、私自身の調査結果を加えた。

（6）一戸の没年は曾根注（5）項などで、未詳とされていたが、顧偉良注（5）論文が明らかにした。

（7）東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局一、東京大学、一九八六、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部のホームページ「中国語中国文学研究室：研究室一覧」（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/laboratory/database/16.html）〈二〇二一年一一月一九日閲覧〉。

（8）曾根注（5）項。

（9）顧偉良注（5）論文。

（10）大原注（5）論文。

（11）竹内好「中国文学研究会結成のころ」『竹内好全集』第一五巻、筑摩書房、一九八一。

（12）顧偉良注（5）論文。

（13）小川注（5）解説。小川は一戸の中国情勢の認識を次のように整理する（小川のことばを引用）。

①　北京を古都としての中国文化の粋、上海を欧米趣味による抗日思想、という対比としてとらえる点。

②　一部知識人と大衆の知的格差を言い、抗日姿勢が中国国民全体のものではないと主張し、「民衆を教化する大使命」を日

本が担っているとする点。

③　日本の侵略を東洋民族平和のためであり、中国人、特に知識人の誤解をとくべきだと唱える点。

(14) なお、小川はこの引用文に続けて、「…一戸務の矛盾には、しかしながら現在につながる日本人の自己認識のナイーブさがあり、改めて問い直すべきものをはらんでいる」という問題提起をしている。

(15) 顧偉良注（5）論文。

(16) 信綱は「英訳萬葉集に就いて」を、「斯くして、萬葉学史上劃期的の斯の大事業が、回一回完成の域に近づきつつあるは、衷心より欣快に堪へない次第である」ということばで結んでいる。また、「東京朝日新聞」一九三八年七月一六日付朝刊一一面の記事「英詩人・さよなら　十四年ぶりで帰国」によれば、英訳萬葉集の監修を務めたラルフ・ホジソン Ralph Hodgsonが、七月一五日の帰国送別会で、「長年努力した英文萬葉集も愈々出来上り私も任務を終りました」と語っている。

(17) 小松〈小川〉靖彦「〈浪曼主義〉と『萬葉集』―中河與一『萬葉の精神』をめぐって〈戦争と萬葉集〉―」「繡」第29号、二〇一七・三。

(18) 半藤一利『昭和史　1926-1945』平凡社ライブラリー、一八三～一八五頁、平凡社、二〇〇九。

(19) 初版＝一九三七年一月二七日、再版＝同年一月三〇日、三版＝同年二月一日、四版＝同年同月五日、五版＝同年同月六日、六版＝同年同月八日、七版＝一九三九年八月一九日、八版＝一九四一年一一月二九日（架蔵本の奥書による）。久松『萬葉集に現れたる日本精神』については、小松（小川）靖彦「「萬葉精神」をめぐって―戦争下の久松潜一・武田祐吉の萬葉論〈戦争と萬葉集〉」（上野誠、大浦誠士、村田右富実編『万葉をヨム方法論の今とこれから』笠間書院、二〇一八）参照。

(20) 「萬葉集の支那訳」は、『現代支那の文化と芸術』から『支那の発見』に再録されるに当たり、末尾の注として、①一九四一年に『萬葉集』の「支那訳」を含む銭稲孫『日本の詩歌』が刊行されたこと、②「支那事変」勃発後に日本人の「支那認識」が変化し、国際文化振興会も日本文化の支那進出事業を進めていること、③郭沫若による『楚辞』の現代語訳の出典が、『屈原』（上海開明書店）であることを加筆。

(21) 謝六逸の日本古典文学の研究と受容については、西野入篤男「謝六逸へのまなざし―中国における日本古典文学受容の草創期―」（『日本文学』第62巻第2号、二〇一三・二）が参照される。

(22) 目次でのタイトルは「日本の古典文学について」となっている。

(23) 仮に初出の段階で一戸が謝六逸の「日本古典文学に就て」に気づいていなかったとしても、『現代支那の文化と芸術』に再録する際、一戸は自分の論点が、謝六逸の論点と重なることを認め、特に変更を必要としなかったと見ることができる。

(24) 小松靖彦「願はくはわれ春風に身をなして―佐佐木信綱の萬葉学における「評釈」〔『萬葉集選釈』と『新月』〕―」『青山学院大学紀要』第54号、二〇一三・三。

(25) 日本の注釈書は、「泣血哀慟歌」については、真情や思慕の深さ激しさを見る一方で、「単純ながら変化に富んでゐて」（佐佐木信綱『萬葉集選釈』）、「言語は相当に複雑であるが、内容は単純である」（斎藤茂吉『柿本人麿評釈篇之上』岩波書店、一九三七・五）などの指摘も行なっている。この〈単純さ〉が、謝六逸の言う「軽淡」と関わっているのであろう。

(26) 謝六逸も一戸と同様の立場をとっていたと見られる。「日本古典文学に就て」において、日本漢詩に対して、「日本には自ら其の情感を表現する適当な詩形が存在するのに、漢詩を作るといふことは、余のどうしても賛成しない所である」と強く批判している。

(27) 小林『現代日用新語辞典』は、「同文同種」の意味を「他の国とお互に文字が同じで、そして人種も同じうすることをいふ。例へば我が国と支那との如き類」と説明している。

(28) 夏剛によれば、和製漢語の四字熟語「同文同種」は、他の多くの和製漢語の四字熟語と異なり、中国には逆輸入されていないという（「言語の異同に見る日中の「文化縁」と「文化溝（カルチャー・ギャップ）(1)」」「立命館国際研究」30巻1号、二〇一七・六）。張永嬌氏の教示によれば、孫文の一九一四年一一月付書翰「朝日新聞記者に答ふ」に、中国に侵略しながら、中国が日本を恨むことを不当とする日本の論調に対して「これ今日日本人の同種同文を言ふものの句調なり」と述べた例が見える（外務省調査部 訳編『孫文全集』第七巻〈電文・書翰・遺書〉）三三〇頁、第一公論社、一九四〇・一〇）。戦時下の一九四〇年代前後に編纂された『国民辞典』には「同文同種は日本が侵略を正当化するための、欺瞞性のあるスローガンでしかない」と定義しており、現代中国の辞典では、「同文同種」は収録されていない。現在の日中関係を表現する際にも、「同文同種」は公的な文章では使われていない。ただし、マスメディアでは、台湾との関係について、よく使われるフレーズであるという。

(29) 第29回戦争と萬葉集研究会での口頭発表の際、孫世偉氏から、果たして日本の文学史・文化史において、中国語を〈翻訳〉したことがあったのか、という問題提起があった。マシュー・レイノルズは、〈漢文訓読〉を、西洋での〈翻訳〉の役割とは全く異なり、ある言語の読者が別の言語で書かれた文章がわかるようになる、言語と言語の間の「中立地帯（ノーマンズランド）」と捉える（『翻訳―訳すことのストラテジー』秋草俊一郎訳、一〇～一一頁、白水社、二〇一九）。〈漢文訓読〉は日中の文化的関係を考える鍵となる。

(30) 竹内好「日本人のアジア観」『日本とアジア』竹内好評論集第三巻、筑摩書房、一九六六、『日本とアジア』ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九三。引用箇所の頁数はちくま学芸文庫による。

(31) 一戸と同様に「異文異種」の立場をとる論として歴史学者・津田左右吉『支那思想と日本』（岩波新書、岩波書店、一九三八・一一）がある。津田は「一つの東洋文化といふものは無い」と断じ、「日本と支那と、日本人の生活と支那人のそれとは、すべてにおいて全くちがつてゐる」と述べた（「まへがき」二～四頁）。小

野寺史郎は、津田の論を「日本の西洋近代化を肯定し、停滞した中国との違いを強調する典型的な脱亜論の性格を持つ」と見た（『戦後日本の中国観―アジアの近代をめぐる葛藤』中公選書、五〇頁、中公論新社、二〇二一）。しかし、津田は、日本が「支那を導く」ことも主張しており、「興亜論」的な性格も持ち合わせている。一九四〇年二月二五日発行の「日本学芸新聞」第80号で、津田の『支那思想と日本』を批判するキャンペーンが張られ、その一環として行われた文学者へのアンケートで、一戸は津田を擁護する立場をとった。一戸の学問的公平性を示した出来事として注目されるとともに、一戸の論と津田の論の親近性をも窺うことができる。

(32) 引用箇所の直後で、竹内は林房雄の「大東亜戦争」肯定論に言及し、「大東亜戦争」の侵略的側面は否定できないと言う。しかし、侵略を憎むあまり、「侵略という形を通じてあらわされているアジア連帯感までを否定する」ことは誤りとする。孫歌によれば、安保闘争後という状況の中で、竹内は林らと議論を交わしつつ、真の意味での「民族独立」を模索していた（『竹内好という問い』第四章三・内在的否定としての「伝統」、岩波書店、二〇〇五）。この竹内の方向性と「アジア連帯感」の関係については今後さらに検討する必要がある。

(33) 小野寺注（31）書、一〇～一一頁。ただし、小野寺は「アジア主義」というタームで説明する。

(34) 小松靖彦『戦争下の文学者たち―『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』四八～五六頁、花鳥社、二〇二一。

(35) エズラ・F・ヴォーゲル『日中関係史―1500年の交流から読むアジアの未来』益尾知佐子訳、三一五～三一六頁、日本経済新聞出版社、二〇一九〔この記述のある第7章はヴォーゲルとリチャード・ダイクの共同執筆〕。

(36) 江沛注（1）論文。

(37) 「支那」の民衆が国家観念を持たないというイメージは、二〇世紀初頭の徳富蘇峰、山路愛山の言説以来、通説的に繰り返し主張されたものである（小野寺注（31）書、一四～一六頁）。ただし、一戸はそのような民衆に極めて強い憐みを感じていた。一戸は、苗族出身の沈従文の、民衆の暮らしを描いた小説を「支那人の素朴味、無垢純粋の麗はしさ」を表現したものとして絶賛してもいる（「野生美謳歌」『支那の発見』）。一戸がこのような「支那」の民衆像に強く心惹かれたのは、モダニズムの反動とも考えられるが、今後さらに検討したい。

(38) 一戸は「日本精神」を言いながら、その内実を明確に語ることはない。一九三〇、四〇年代に政府、軍、国家主義者、「国文学者」の主張した「日本精神」の中核には、天皇に対する忠義心があった。一戸は「支那事変」における「皇軍」の進撃に興奮と感謝を表明するが、天皇への忠義心をダイレクトに述べることはなかった。そのあり方は、交流のあった北園克衛に近い（小松注（34）書、二〇七、二一七頁）。

(39) 鄒双双『「文化漢奸」と呼ばれた男　万葉集を訳した銭稲孫の

生涯』八四～八七頁、東方書店、二〇一四。

(40) 佐佐木信綱と銭稲孫による『萬葉集』の「漢訳」の経緯については、鄒双双の綿密な調査に拠る（注（39）書、九九～一二七頁）

(41) 中国古典詩歌が「形式」と「韻律」を重視していることも、『萬葉集』を文語定型詩に訳した理由である。鄒双双によれば、銭稲孫は、特に『詩経』の体裁を強く意識していた（注（39）書、一一六～一二一頁）。なお、呉衛峰は、『漢訳萬葉集選』所収の新村出の文章に、信綱が「善隣古国の近代語に摹訳して、同国の雅友に示したい」という希望を持っていたと記していることに注目し、信綱が「当初、近代口語による中国語訳を望んでおり、しかしすでに雑誌に若干発表された銭訳の評判の良さによって翻意し、最終的に古典漢詩風の訳に同意したのではないかと推測される」とする（「和歌の翻訳と異文化体験の問題―銭稲孫著『漢訳萬葉集選』を中心に―」「東北公益文科大学総合研究論集」第12号、二〇〇七・六）。信綱の『萬葉集』翻訳については別稿を期したい。

今日まで『萬葉集』の中国語訳は文語訳がよいか口語訳がよいかが争点となっている（呉衛峰「和歌の翻訳と異文化体験の問題」、同「白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その一）―謝六逸とその『日本文学史』」「東北公益文科大学総合研究論集」第16号、二〇〇九・六、金偉、呉彦「中国語訳『万葉集』について」「富山大学芸術文化学部紀要」第6巻、二〇一二・二）。呉衛峰は、和歌の文語定型詩訳を、異文化として和歌を伝えるのではなく、「日中間に存する千年以上の文化的繋がりを維持することに重点を置いている」と批判している（「和歌の翻訳と異文化体験の問題」）。

(42) 第一回大東亜文学者大会翌月の一二月に刊行された「新潮」（第39年第12号）の座談会「大東亜作家文学談」で一戸は、「印度の文化、支那の文化、日本の文化―かういふ三つの対立が非常にはつきりしてゐて、融合してゐない」と「異文異種」的見方に立ちつつも、融合のために、第一回大東亜文学者大会で提案した「日本漢字の支那への逆輸入」を強く主張している。なお、橋本雄一は、第二回大東亜文学者大会（一九四三年八月）での、中華民国政府（重慶国民政府）側の文学との関係をめぐる議論で、「あくまで相手を「大東亜」なる精神文化に取り込もうとする主張」した知識人として、「小田嶽夫（作家）、高田真治（中国思想研究、東京帝大教授）、一戸務（作家）」を挙げている（「「大東亜」の時間、ネイティブの時間―第二回大東亜文学者大会にある対重慶ディスクール―」「東京外国語大学論集」第85号、二〇一二・一二）。

【付記】本稿は第29回戦争と萬葉集研究会（二〇二一・一一・二〇）の研究発表に基づく。

（こまつ・やすひこ／青山学院大学教授）